

獲得する共有空間、そして喜びの交歓

— 小山田徹とバザールカフェ

北原 恵

昨年（一九九九年）、夏も終わりの頃、ひとりの友人が連れていってくれた空間。京都の烏丸今出川から一筋北に上がった通りに、そのカフェは面していた。クラッパート・インと呼ばれる築約八〇年のこの洋館には、昔から、海外からの宣教師たちが住んできたらしい。

建物の管理者である日本キリスト教団京都地区と、バザールカフェ・プロジェクトと共に企画するこの非営利のカフェは、一九九九年四月に改装が始まられ、九月から週三日間オープンすることとなつた。大半の労働は毎日延べ一〇人のボランティアによって支えられ、日本で就労が困難な在日外国人にも新たな就労の場を提供している。運営には、

HIV/AIDS関連の様々なグループや、在宅介護や在日外国人の就労を支援するグループなどが集まり、彼らの言葉によれば「名前の通り市場的な場と時間を提供し、情報や人材、愛、怒り、悲しみ、喜びなどの自由な交換、交通を行なうこと」を目的としてきた。前通り市場的な場と時間を提供し、情報や人材、愛、怒り、悲しみ、喜びなどの自由な交換、交通を行なうこと」を目的としてきた。名前の通り市場的な場と時間を提供し、情報や人材、愛、怒り、悲しみ、喜びなどの自由な交換、交通を行なうこと」を目的としてきた。

今回は、運営に携わってこられた小山田徹さん、バザールカフェとの関わりについて、またアーティストとしての活動の一端についてお話をうかがうことができた。小山田さんは、ウイークエンドカフェというのが終わつたときに…

北原 ウイークエンドカフェって、どういうものだったんですか？

小山田 去年（一九九八年）の三月くらいかな。僕が友人達と、九七年くらいまでやつていたウイークエンドカフェというのが終わつたとき…

なつたら、それを体験した人たちがもう一度そういうのがないと不便だと思いつめるようになつて。

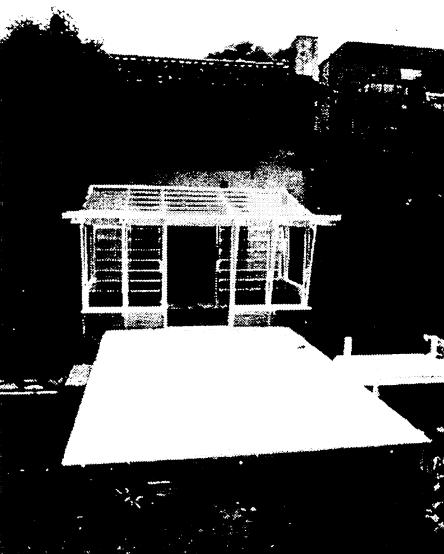
そういうこうしているうちに、キリスト教会の中で様々な人権問題の活動とかHIV/AIDS関係のボランティアをやってたメンバーたちが中心になつて、色んな活動をやつてる人々との交流、ネットワークを何らかの形でつくれないかということで、ウイークエンドカフェみたいなミーティングプレイスを共同

でいた学生たちで、近くに、寮が自治権を持つデッドスペースがあるという話になつて。

その時すでに、アーツスケープとかダムタープのオフィスといった色んな共有空間といふのはあつたんだけど、そういうところってやっぱり、ある団体の附属物というか、そこには来るためにはそこの団体や集団を知つたり立場的なものを明確にしないとなかなか難しい。

あとナイトクラブなどでの色んなイベントも同時に起つていたんやけど、話をする空間ではなかつたんやね。じつくりしゃべれて気軽に来れるような場所を自分たちで持てないかなということで、そのデッドスペースを利用してウイークエンドカフェを始めた。週末だけオールナイトで営業してたんです。

やり始めたら、運営はシンプルやし、場所的にも恵まれてたから、全然宣伝してなかつたけど、場が出来ると色んな人が来る。で友達を連れてくる、今度は友達がホスト役になつて新しい友達を紹介していくっていう形で、それもカフェやから、分野や職業を問わない関係でどんどん人が増えていった。



(1) バザールカフェ概観。完成直後の広々としたテラスと、屋外デッキ部分
(1999年5月6日撮影)

は、これまで「ダムタイプ」の舞台監督や「アーツスケープ」の運営、エイズ・ポスター・プロジェクトなど、数々のアーティスト活動を行なつてこられたが、インタビューに際して「これはあくまで一参加者自分の意見にすぎない」と前置きして語り始めてくださいました。

デッドスペースが共有空間に

北原 バザールカフェというのは複数の人々で運営されているそうですが、つくろうといふ話になつたのはいつ頃なんですか？

小山田 去年（一九九八年）の三月くらいかな。僕が友人達と、九七年くらいまでやつていたウイークエンドカフェというのが終わつたとき…

なつたら、それを体験した人たちがもう一度そういうのがないと不便だと思いつめるようになつて。

その最初のミーティングに、ノウハウを活かして一緒にやれいかということで僕も参加した。

小山田 アーツスケープを始めた時に出会つた数人が、たまたま京都大学の地塩寮に住んでいました。アーティストとしての活動の一端についてお話をうかがうことができた。小山田さん

で持つというのはどうだろうという話が出た。接点としての空間

小山田 最初の一年はとりあえずスタッフを集めたり空間のお披露目をする意味で、二週間にいっぷんだけバー・ティーとかを始めた。営業しながらミーティングを重ねて、どういふ方向であそこを運営していくつもりいかとかどうしたいかという目標みたいなものを練り上げて。同時に寄付みたいなものを募つて、今年の四月からその寄付を元に改装をして、とりあえずオープ

ンという形を迎えた。

北原 具体的にはどういふところを改装されたんですか？

小山田 一応普通の住居だつたんで、公衆衛生上

の営業認可をとるためにキッチン、厨房とかトイレとか。あと庭とか室内空間を、多くの人が出入りできるカフェの形に空間的に改造しました。

北原 一階部分を使ってらっしゃるんですよ。

ね。あれで何平米くらいですか？

小山田 あの部屋だけで四〇平米くらいかな。

とにかく庭が広いですからね、庭を有効に使

うという方向が、全体の運営目標と重なる部

分がある。

というのは、運営母体がいろんな団体とかいろんな活動をしている個人の寄せ集めなん

よ。カフェの運営目的を、明確なひとつ言葉で表されるような集団の形態を持っていな

い、持てないというか、持ちたくない、決め

たくない、のかな。それに合わせてその趣旨

を明確に表してしまったのではない空間をつく

りたくて。

他者にちょっとかいを出す喜び

北原 いろんな人の寄せ集めっておつしやいましたけど、どういう人が運営で関わってい

るんですか？

小山田 長年HIV/AIDSのカウンセリ

ングやケアサポートをしている人々とか、外国人就労者のサポートをやっている人たちとか、あと女性の様々な活動もしくは問題を扱っている団体とか、アジアなどの少数民族のサポートをしている人とか、様々な国の住居問題を解決しようとしている国際組織の活動の一つなんやけどそういうのをやっている人々とか。

それからアーティスト、学生たちとか、そ

ういう共有空間を造ることやそのシステムに共鳴している個人たち。それは社会人も含め社会人では特に建築家とか庭師さん、工務店の方とか、そういう方々も参加してくれてる。

北原 小山田さんは何を担当したんですか？

小山田 僕は具体的なカフェのシステムづくりと改装、及びその作業の現場監督、兼大工。

北原 カフェのシステムづくりってどんな？

小山田 どんな形態のカフェだと、少ない経済で効率的に出来るか、とか。

北原 え、すごいなそれは。それは誰でも知りたいんとちやう？

小山田 あの、今の日本型の資本主義の上で

は無理な話やねんけど、たとえば無償の労働

といふものがあるという前提のもとに何が出来るのか、とか、無償の労働が組み込まれたシステムがどれだけ継続できるかとか、できるために何が必要か、とか、

北原 教えてもらいますか？

小山田 :なんか偶然が幸いすることの方が多くてなかなか理論化できなかつたりするんやけど、二つの柱があると思うねん。

北原 教えてもらいますか？

小山田 :なんか偶然が幸いすることの方が多くてなかなか理論化できなかつたりするんやけど、二つの柱があると思うねん。

北原 一つは言語化できる理念。もう一つは楽し

みというか快楽。その両方が微妙なバランスを持ちながら両方とも強すぎず弱すぎず関係しあっているのがベストかなと。どっちかが欠けてうまくいかなくなる。それをどうや

つたらうまいことバランスがとれるのかな、

つていう。

北原 その理念的な部分つていうのは？

小山田 特に对外的な交渉には、そういう理

念的な面というのがないと、人をなかなか説

得できなかつたりシステムにいくこんでいけ

なかつたりする。だからお互いのやりたい方

向というのを、緩やかに出来る限り言語にし

たやつを共有してる。

ただ、それを強力に押し進めていくとトッ

プダウンになりがちなんですよね。上で決め

たやつを共有してる。

ただ、それを強力に押し進めていくとトッ

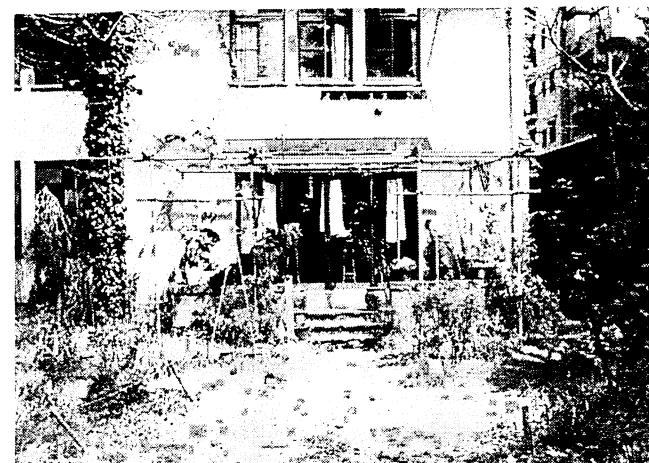
プダウンになりがちなんですよね。上で決め

たやつを共有してる。

北原 ただ、それを強力を押し進めていくとトッ

プダウンになりがちなんですよね。上で決め

たやつを共有してる。



(2) 改装前の庭。元々は3人の宣教師の住む住宅だった

た理念とか一つ出来あがつた理念が、全ての参加者や集団を縛ってしまう。イデオロギーというやつと一緒にやけど、たとえばどんなに愛に溢れた理念で、こうするべきなんだっていわれても、それはその人の考え方であって、

違う他者に対しては共有できない部分もあるわけでしょう。かえって反発したり離れていく人も多いと思う。

そこで「労働」というのがキーポイントだ

と思っていて、なぜカフェかというところと

もつながるんだけど、たとえばオフィスをつくるっていうんやつたら、まず

グループをつくるときに理念的闘争とい

うのをしなきゃいけない。でもカフェ

エというのは、もつとたくさん労働

が存在している空間なんだよね。

たとえばコップを洗う、お客様と

接する、その空間を掃除するとかディ

コレイトする…そういうさまざまな労

働があるところに参加してもらって、

それが面白ければ何かの関係をつくつ

いくことが可能なんじやないかな。

無償なのにうつかりやつちやうぐらい楽しい、そういう労働のつくり方とい

うのがないもんかなと。カフェとい

具体的な労働がたくさんあるシステムの中でもそれを探していくたりいろいろ実験したりするのもひとつ目標。

北原 その労働の快樂っていうのは、

北原 その快樂の快樂っていうのは、

うのは、たぶん大きいと思ふんやけど。

空間が狭かつたらその中で行われることつて統一されがちなんやね。たとえば室内だけだとしたら、みんなの目が届く。だからおの

ずっとスタイルの強要というのが行われそうな感じがするんだけど、空間が広ければ、あと開放的であれば、さまざまなスタイルを持つ

た人が存在していてもそれが他者とか他のグループに対して影響力をもちにくから気楽に存在できる。融合するんやつたら長い時間

をかけて融合もできるし、一人でいたい人は庭の端っこへいってぼうっと過ごすことも出来る。みんなで集まりたい人は集まれるけど、それをやつてカフェ全体がそういう空間にな

つちやうんじやなくて、隙間がまだたくさんあるという空間。

北原 バザールカフェが心地いいのは、単に広いだけじゃなくて、広い空間の外と中をどうつなげるか、という具体的な設計の一つ一つの力だと思う。かなり工夫されてるなあって感じます。

北原 運営の方ですけど、厨房で働いていらっしゃる経験を共有する

北原 バザールカフェが心地いいのは、単に広いだけじゃなくて、広い空間の外と中をどうつなげるか、という具体的な設計の一つ一つの力だと思う。かなり工夫されてるなあって感じます。

つしやるのが外国人の方なんですか？

小山田 シエフって呼ばれる毎日の日替わりメニューを考えているのが、在日外国人の方。タイとか韓国、フィリピン、ケニア、今のところそのぐらいかな。そなたちが日替わりで交代交代でレシピを考えてる。

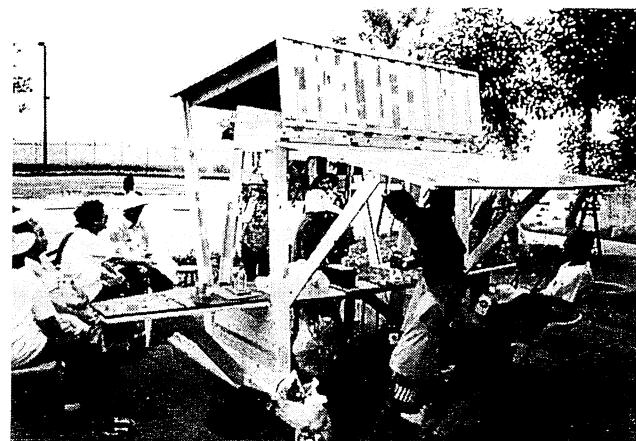
北原 レシピは毎回変わるんですね。小山田 今はほとんど全員が女性の方で、それぞれのお国の家庭料理をベースにレシピをいろいろ考へて常にシェフと二人で組んで一緒に調理する。

北原 キッチンチーフは日本人？

小山田 うん、今二名か三名が交代交代でやつてゐるかな。長時間居れない人もいるからそれをサポートする意味でのキッチンチーフ。

(3) テラスの棟上げ作業の様子 (1999年4月15日撮影)





(5) 大勢のお客で賑わう屋台カフェ

動く空間・共有茶屋
北原 小山田さんは、バザールカフェのほかにも、色々な試みをしておられます。(写真を見て 図版4、5) これはなんですか?

小山田 これは屋台カフェ。ジュースとアルコールを出します。芦屋の震災復興住宅という公団が出来たときに南芦屋浜コミュニティ&アート計画っていう企画があって、企画として持ちこんだもの。普通は自治会とかなかなか説得できないけど、アートという文脈でいくと通る。

震災復興ということで、色々な自治体で色々なプロジェクトが組まれている。コミュニティ再建という感じで。けど、「さあ皆さん一緒に」っていうのに絶対参加しようとへん入っているでしょ(笑)。僕もそうやけど。

決してそういう試みを批判するわけじゃないねんけど、やっぱり拾えないタイプの人もいたりして、そういう人との関係を作りたいと思った。やっぱり色々な理由でアルコール依存になつている人とかいるらしい。普段は一人で家に閉じこもつて酒くらつておっさんとかおばあちゃんとかかなり多くてね。それがこういう屋台で行くと、ふらふらっと出できはつて。毎日朝から待つておじいさんとかがいる。人としやべ

いる。カフェの中に、医療関係とか、老人介護とか、ドメスティックバイオレンスとかのケアサポートの一環として支援する場があるもいい。お医者さんとか看護婦さんのグループとかがいるから、カウンセリングルーム兼医療サポート、実際そこで治療するわけではないけど相談できたりとか、あそこの病院やうかな。気軽に来けるそういう場が街中に存在してないのはけつこう大きな問題やと思うね。

北原 うん、そうですよね。

小山田 老人介護だったら、お弁当のデリバリーとか、そういう可能性を考えたり。拡大していくことは可能だし、これからどうなるか分からへんけど、僕自身の希望としては、地域社会との接点を出来るだけ持ちたい。たとえば庭の管理とかあいうのも、老人の方で、庭とか畠仕事に関してはノウハウ持つたりする人多いでしょ。そういう人とプロの庭師さんと、若者たち子どもたちとかと一緒にそういう庭の作業をするという状態とかが、恒常に当たり前のようになつてた



(4) 芦屋にて、屋台カフェ「共有茶屋」営業中

ら、なんかケアサポートっていう大上段なシステムじゃなくても変わっていくんとちやうかな、とかね。

北原 来てはりますか? お年寄りの方とか、ご両親とかをきっかけにして広げていく仕掛けみたいなものをそろそろ考えたいなと。

北原 バザールカフェでの食事はどうなんだろう。お年寄りの口に合うんやろか。

小山田 そうやね、刺激的なものが多いから。ヘルシーメニューとかをそろそろ作り始めてるんですよ。そういうのがきっかけとなつて、他の部分と運動しながら、システムをちょっとずつ作つていけたらいいんちやうかな。

依存するんやつたら、アルコール依存からりながら飲むつていうのが喜びだつていうことを思い出したような感じで。そういう人たちと話をしていくと、職人さんが多いねんけど、そういう大きな社会のシステムの歪みなどは敏感に感じている人たちやつたりする。雑談の中に鋭い意見がいっぱい入つてたりなんかして。

他者依存に変わってほしかつてん。アルコールだつて言つても、絶対自分から部屋の中で飲んでんねん。どんなに禁止してもそこまでは禁止できないやん。そういうよりは、人と会つて飲んだりしゃべつたりという方に依存するつていう方に落ちこんでくれた方が、なんか楽しいなとか思つて。

で、やつてたら住んでる子どもたちが手伝ってくれるんですわ。子どもたちがマスターとかチヤマやつてくれて。

北原 子どもってそういうの好きですよね。

小山田 じいさんはあんたちがお客様で、それはもう素晴らしい風景なんよ。けつこう楽しかつたな。

そこのおじいちゃんたちは職人さんなんやから本来はこういうのを勝手に作れるはずや

ねんな。そういうののきつかけになつてくれたかなと思つて。

でもとりあえず一回でもこれを体験して、これ楽しいで、つて記憶として入つてたとしたら、ある偶然がめぐつてきたときの弾みの短時間やけど、記憶を埋め込むつていう意味つき方つて全然違うと思うねん。とりあえず、

有効かなと思つて。

バザールカフェとかそういうのは、自分が住むコミュニティの中になつて、自分の生活のサイクルに埋め込む活動のひとつでしょ。それとは違つて、出かけていつてイベントリーに行うことつていうのも今後両方やつてこうかな。

北原 これはその初めての例やつたんですね。屋台やつたら寄つてくるつていうのはなぜですか？

小山田 その人に刻み込まれた記憶やと思うなんけど。ふらーつと寄つてきやすいし。

テーブルみたいのじゃなくて、屋根があつて、看板があつて、車で動く。あと対面座席でマスターがいて、商売やつてる、つていう形をつくると寄つてくる。こっちの方がのんびりじっくり話が出来るねん。

秘密基地からはじまる

北原 こういう共有のスペースを、アーティストが入つて意識的に作ろうというのを増えてるんでしょうか？

小山田 増えていると思うよ。かなり。

北原 キャップハウスやつたつけ？ プラジルの移民会館を作つているところとか、今度行つてみようと思うんやけど。

小山田 あれも、アーティストたちがます自分で創造というのを作つていくこうということで、杉山とも子さんつて僕の先輩がやつてます。

北原 京都芸大の先輩？ そういえば小山田さんは芸大の何科やつたんですか？

小山田 日本画です。

北原 どうして日本画？

小山田 あの、大学来るときはもう情報少ないからさ、京都といえば日本画、日本画といえば京都というふうに単純にそれだけで。

北原 それはひどい結びつき（笑）。

小山田 というか、絵を描くのが元々好きな興味やつたと思うんけどね。

北原 子どもの頃つていうのは？

小山田 秘密基地とかさ。

北原 あーやりましたやりました。私もやつてたわ。そうかあれか。板つ切れとか集めて。

小山田 あれはかなり大きな共有体験ですわ。あれつて獲得空間でしょ。それと子ども同士の中のコミュニケーションを図るのに必要な場を作つたわけでしょ。そこに来ることが共に

始まつて。北原 小山田さんご自身の話をちょっと聞いていいですか？ ダムタイプのやつてきはつたことにも、ウイークエンドカフェにしても今度のバザールカフェにしても、その理念と快楽の二つの柱という点で、ものすごく共通しているような気がして。小山田 個人的な興味としては、共有空間とか共有時間というのを、どう創り出して獲得していくのかつていうのが、子どもの頃からの興味やつたと思うんけどね。

北原 子どもの頃つていうのは？

小山田 秘密基地とかさ。

北原 あーやりましたやりました。私もやつてたわ。そうかあれか。板つ切れとか集めて。

小山田 あれはかなり大きな共有体験ですわ。地理把握というものをし始めるときも知して記憶していくのかに興味があつてさ。

小山田 個人的にそういう、何にも知らん場所で何にもない場所、を自分がどうやって認知して記憶していくのかに興味があつてさ。

北原 碓砂漠やから岩だらけなんですよ。で、地理把握というものをし始めるときも知して記憶していくのかに興味があつてさ。

小山田 たとえばインディアンの狩猟の場所や場所であつたりとか、あるいは憎むべき

資本主義のプロパガンダであつたりとか人それぞれであつて、それによつて風景の記憶のされ方つていうのが全然違うつていうところにすごい興味があつてんね。

北原 誰とも会わなかつたんですか？

小山田 週末に町に住んでる老人たちが何人かで遊びに来てくれる。ヒマやからみんな。

北原 へえ、遊びに来るもんですか？ （笑）

小山田 「変な日本人が一人いるで」って感じで、近くの町 자체が老人の多い町で、友達のお父さんたちがうわざを広めてくれて。

北原 すげ面白いおつさんおばさんばっかやつてんね。その中に民間の矢じり研究家のおじいさんがいて、その辺の歴史をいろいろ説明してくれた。そしたらもう途端に地形が、

クチャ一をやつたときには使つたんやけど…。

北原 「共有空間開発に関するモノ」？ （笑）

「小学時代 友人達と秘密基地を共有」「小中学生時代 兄と部屋を共有」（笑）

小山田 自分の何か今までのターニングポイントというか、きっかけになつた出来事とその環境を見つけると、やっぱり何々を共有とかそういうのがほとんどなんよ。一人で思い立つてつていうよりは、何かを共有するつていうのが興奮のきっかけになつて、物事が進んでいるような気がして。

その延長で眺めると、ダムタイプもアートスケープも、ウイークエンドカフェもこのバザールカフェも、自分の中では始末がつく、人で生活」つて、これいつ頃ですか？ 砂漠に一人でつていうのは、何が共有空間になつたんですか？

北原 「三ヶ月間アメリカに滞在 砂漠に人で生活」つて、これいつ頃ですか？ 砂漠に一人でつていうのは、何が共有空間になつたんですか？

小山田 去年（一九九八年）のちょうど今頃、冬場に三ヶ月間アメリカに行つて、そのうちのヶ月を砂漠の中で生活した。ACCつてところから助成金をもらつて。その名目が、風景の記憶とか風景のフィールドワークやつ

たかなと思つて。

北原 こういう共有のスペースを、アーティストが入つて意識的に作ろうというのを増えてるんでしょうか？

小山田 ニューメキシコの北の方。タオスっていう町のちょっと離れたところの砂漠の中。

北原 ちょっと想像つかないんですけど。どういう生活だったのか。何してはつたんですか？

風景がそれぞれ意味のあるものに変わるのね。満月が最初に昇つてきた瞬間を眺めるのにも、すごいいいポジションの場所があつて、その周辺には矢じりを作つた後がたくさん散らばつてんねん。あやつぱり昔のインディアンもここで見てはつたんやなと思うとゾクゾクつくるよね。その時は、風景の記憶の共有を楽しんでた。

勝手につながる

北原 これからどんなことをやりたいと思つていますか？

小山田 うーん、色んなタイプの共有空間をまだ作つていくことになるかなと思うんだけどね。僕のヴィジョンとしては、このバザールカフェっていうのは色んな意味で、多くのもの始まりみたいな感じ。特殊性を持つものが世の中にたくさん存在していれば、それを選択するという瞬間ににおいて公平であればいい、その空間性とか組織性っていうのは、多少暴走気味に特殊性を帯びても、たくさん存在していれば、僕はいいんじゃないか、と思ってんね。

勢いで色んなものがたくさん出来て、それ

は自然に淘汰されたり統合されたりというのを繰り返すだろう。でも今このところあまりにも数が少ないので、一つの空間とか一つの母体が色々な機能を負わなきやいけない。それってけつこう体力消耗しがちやなと思つて。

北原 バザールカフェはどうですか？

小山田 やつぱり多少無理している向きはあると思うんだけどね。でもまあそういう中では、ごくうまくいっている方だと思ひます。

いろんな種類のミーティングプレイスがあつてもいいし、色んな活動をする場所があつてもいい、とにかく数が増えること、それもインディベンデントの数がたくさん増えるつていうのが一番目指してることかなあ。

大きな話でいうと始末つかへんのやけど、国家とか巨大な組織が一番恐れるのは、個人が勝手に色んなことやり始めたり、個人が勝手につな

がりはじめたり、個人が勝手に恋愛をし始めたりすることやと思うのね。でも、そのことが恒常に起こらない限りは、巨大な組織つていうのに固められていくし、何かエネルギーが持続しないよね。「勝手に」っていうのがまたすごい難しいんだけど、とにかくたくさん起こるというのは方向性として悪くない。色んなことが起こって、その断面というのを色んな人がたくさん経験したり見比べたり出来て、その中で自分の判断で選べる状態をつくるとか、自分が参加するという形をとりやすくするとか、そういうのが都市の社会の中での基本になれば面白いにと思つて。そのための共有空間づくりというのを、個人的には色々企画したり楽しんでいけばいいなと思う。

北原 何かモデルのようなものが頭の中にあるんですか？

小山田 デンマークとかニューヨークに行つたとき、一番最初に連れて行かれるのがホームパーティ。一晩のうちに三ヵ所くらい、もうホームパーティのはしごなんよ。

北原 それは全部関係のない？

小山田 ないんやけど、友達が接点になつて

て、あつちに行つてみようやつて誘われて行つたらそこでまた出会つた人が連れてつれて定着したとしたらすごい面白いなと思って。そういうホームパーティを延長したような形での色んなイベントや空間、そういうのが増えていけば、色んなものを変えていく原動力にはなるんかなあと。ビジネスとかオフィシャルな状態でのパーティやイベントつて、どうしても既存のルールの中でやらなきやいけないんだけど、ホームパーティって勝手にやつてるわけやからね。突破口として面白いかなとか思つた。

あと海外の僕らが向こうでお世話になつた友達が京都に来たときに、色んな人に会わせ

たり、そこに連れて行けば気楽に楽しめる色んな人とつながれる場所つていうのを持つてなかつたんだよね。来たらどこに連れていくこ

う、神社仏閣しかないんかな（笑）とか。

がたくさん存在してたら、そこに連れて行けば勝手に友達つくつて生活の断片ていうのに参加できるわけでしょ。そういうシステムを

自分たちが持てるか持てないかというのは、大きな意味での他者、ローカルコミュニティと外界との関係をつくる意味でも絶対必要なのかな、と。都市っていうのは、これからも剥き出しにならへん生活空間やと思う。そういう中に色々な隙間つていうのを今のうちに作つていかないと、けつこう辛そうやなあと。

北原 今の時代つてその隙間がどんどんつぶれてつて、逆に増えてる時代？

小山田 隙間の要望つていうのは高いと思うんだけど、隙間の建設の仕方つていうのを個人がもう忘れてしまつていて、用意された空間つていうのがどんどん出来てくる時代じゃないかな。

でも、結果的に現実化するものが、提供された場所なのか、用意された場所なのか、獲得した場所なのかつていうので全然違うと思います。僕が進めていきたい方法は、獲得する共有空間ですね。

（一九九九年一二月二〇日、京都にて）



Bazaar Café

バザールカフェ
京都市上京区岡松町258
tel&fax 075-411-2379

営業日は
毎週木曜・金曜・土曜の
朝11:30から夜8:00までです

*駐車場はありませんので車での
お越しはご遠慮下さい